

第48回定期演奏会

# 水星交響楽団

48th  
Regular  
Concert

指揮：齋藤栄一 チェロ独奏：丸山泰雄

C. ニールセン

交響曲第4番 「滅ぼし得ざるもの」

B. ブリテン

チェロと管弦楽のための交響曲

J. シベリウス

交響曲第7番

2013.05.03 Fri 13:00開場 13:30開演  
ミューザ川崎シンフォニーホール

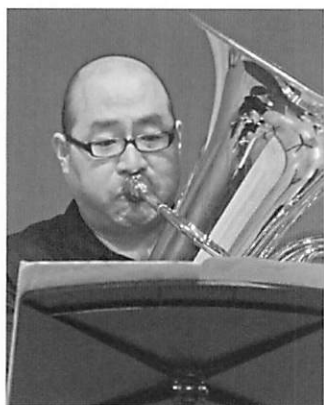
# ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。ごぞいます。

さて、今回のプログラムは、20世紀に活躍した3人の作曲家の交響曲3曲です。交響曲という形式は、ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンなどにより、ドイツ・オーストリアで19世紀に大きく発展し、水響でもおなじみの作曲家マーラーの出現により、19世紀末から20世紀にかけて、まさに爛熟としか形容し難いような頂点を迎えました。その後は、ドイツ・オーストリアより、むしろその周辺国である、北欧・ロシア（ソヴィエト）・イギリス等で、民族性など多様な要素を織り込んだ個性豊かな作品が沢山作られるようになりました。特に、今回取り上げるシベリウスとニールセン、それからソヴィエトのショスタコーヴィチはその代表例と思います。

シベリウスは8曲の交響曲を書いています。第7番はその最後を飾るに相応しい極めて濃密な音楽です。彼は、この曲を発表した後、作品自体を表に出すことが殆どなくなりますが、これ以上突き詰めることが不可能とまで感じられる自由な形式であり、まさに「交響曲の極北」と言えるでしょう。また、ニールセンの曲の交響曲はどれも非常に個性的ですが、今回の第4番は、大国に蹂躪されてきた祖国デンマークの人々を鼓舞するような生命の賛美を高らかにかつ感動的に表す作品です（特に、第4部にあたる部分の2対のティンパニの掛け合いは、他の交響曲には見られない大きな特徴です）。

一方、今年生誕100周年を迎えたブリテンも、オペラ・声楽曲などに加えて、交響曲の分野でも、実にユニークな作品を残しています。「チェロと管弦楽のための交響曲」は、不世出のチェリスト、ロストロポーヴィチによるショスタコーヴィチのチェロ協奏曲第1番初演に触発され書かれたもので、管弦楽と独奏チェロが対等にシンフォニックな響きを作っていくという意味で「交響曲」と名付けられました。



水星交響楽団 運営委員長  
植松 隆治

独奏チェロのパートは技術的にも音楽的にも非常に難しく、それ故か演奏頻度も高いとは言えませんが、冷戦当時の世界に漂う不安感を見事に表現した傑作です（なお、今回の演奏は、アマチュアオーケストラとしては、日本初演となるようです）。

今回のソリスト丸山泰雄さんは、紀尾井シンフォニエッタなどで活躍されている気鋭のチェリストで、特に、20世紀に書かれたチェロ作品に積極的に取り組んでおられ、この曲を演奏するにあたっては、この人しか考えられないということをお願いした次第です。今回も、練習の段階から、その説得力ある音楽に団員一同圧倒されるばかりでした。本日も入魂の演奏を、私自身期待してなりません。それでは、ごゆっくりお楽しみ下さい。

## 水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。

楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

# 本日のプログラム

ジャン・シベリウス  
交響曲第7番 (約23分)

ベンジャミン・ブリテン  
チェロと管弦楽のための交響曲 (約35分)

カール・ニールセン  
交響曲第4番「滅ぼし得ざるもの」 (約35分)

指揮  
齊藤 栄一  
(さいとう えいいち)



京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」(関西初演)の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」(95年、東京文化会館)、「ダフニスとクロエ」(99年、新宿文化センター)を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作(4台のピアノと打楽器)を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」(近代文芸社)、「振っても書いてもしよせん酔狂」(水響興満新報社)がある。

チェロ独奏  
丸山 泰雄  
(まるやま やすお)



87年東京芸術大学音楽学部卒業。89年第58回日本音楽コンクール第1位、増沢賞・特別賞を受賞。イタリアバオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール第3位、特別賞受賞。ドイツマルクノイキルヒェン国際チェロコンクール特別賞。

92年「東京国際音楽コンクール」第2位及びアサヒ・ビール賞を受賞。第2回日本室内楽コンクール第1位及び特別賞受賞。

92年9月より文化庁海外研修員としてベルリン芸術大学に留学、ディプロマを最高位で取得。

現在、ソロを中心に室内楽、主要オーケストラの客演首席で活躍中。紀尾井シンフォニエッタ東京、トウキョウモーツァルトプレーヤーズ(首席)のメンバー。07年にRMMシリーズ5作品目となるソロCD「ラメントツィオチェロ・ヴィルトゥオーゾⅢ (RMM-105)」、08年にはRMM-103以来となるチェリスト12名による演奏

「スーパー・チェロアンサンブル・トウキョウⅡ トゥナイト〜アディオス・ノーノ (RMM-106)」を発表、絶賛販売中。

## 曲目紹介 1

# ジャン・シベリウス

## 交響曲第7番

Jean Sibelius

シベリウスは、1865年に、フィンランド南部のハメーンリンナに生まれました。彼はフィンランドを代表する作曲家であり、1899年に作曲した「フィンランディア」は、当時帝政ロシアの圧政に苦しめられていたフィンランド国民を独立運動に向けて鼓舞し、現在もフィンランド第2の国歌といわれ、世界的にも親しまれる代表作となっています。

シベリウスは生涯に合唱を伴う「クッレルヴォ交響曲」、番号の付いた交響曲を7曲、計8曲の交響曲と呼ばれる作品を遺しました。本日演奏する交響曲第7番は、1910年代に着手され、1924年、シベリウスが58歳のときに彼自身の指揮によりストックホルムにて初演されました。

「第7番」の名の通り、この曲はシベリウスの最後の交響曲です。また、シベリウスは享年91歳と長寿を全うしたのですが、終盤の約30年は曲を発表しておらず、この交響曲7番は作品としては晩年の作ということになります。

交響曲というと、普通は、4つの楽章からなり、45分くらいかかる大規模な曲、というイメージがあると思います。ですがこの曲は、楽章が無く（単一楽章）、演奏時間も20分強と短めです。

### <究極の交響曲>

この曲は、一般的に交響曲史上の中でも「究極の交響曲」とか「交響曲の到達点」などといわれています。交響曲の様々な要素が「凝縮され」、「全ての無駄が省かれ」、「調和と論理性を究めた」交響曲、などと形容されてい

ます。なんだか小難しい曲のようですが、実際にはそうでもなく、やや暗い感じや明るい感じ、荘厳さや素朴さ、懐かしさや感動など、聴いていていろいろな気分が味わえます。ただ、交響曲としては短いので、聴きながら油断をして眠ってしまうと、気がつかないうちに曲が終わってしまう、ということもあるので注意が必要です。

シベリウスは、1907年に、同時代の大作作曲家マーラーと対談をしており、その中で、交響曲について、「様式、形式的な厳密さ、全ての動機の中に内的な関連を作り出す深遠な論理が好きなのだ」と言っています。この第7番は、シベリウスが考えた交響曲の理想を実現したものなのかもしれません。（ちなみにその対談でのマーラーの見解は正反対であり、彼は「そうじゃない！交響曲は世界でなくてはならない。全てを包括するものでなければ」といったそうで、対談は険悪な雰囲気になった？みたいです。）

### <一生に一度は演奏したい曲

(トロンボーン奏者談) >

トロンボーン、というと、オーケストラではだいたい最後列で演奏する、長い管を伸び縮みさせながら演奏する金管楽器ですが、一人で旋律を演奏する（ソロ）はめったにありません。ところが、このシベリウスの交響曲第7番は、トロンボーンにとっては、大変特別な曲のようなのです。

知り合いのトロンボーン奏者の方に、「今度うちのオケでシベ7（注：シベリウス交響曲7番の略称）やるんですよ」などという

ものなら、ほとんどの人は目の色を変えて、「えっ、シベ7やるんですか！？ トロンボーン誰がやるの？ いいなあー いいなあー」という反応をします。

そう、この曲には、大変すばらしい、そしてカッコいいトロンボーンのソロがあります。曲が始まって約5分後、音たちの地平、あるいは混沌の中から、トロンボーンの旋律が浮き上がってきます。そしてこのテーマは、この曲の中では断片的に、あるいは完全な形で再現されたりして随所に現れるとても印象的な旋律です！

それでは、この曲の流れについて簡単に紹介します。

曲はティンパニーから始まり、そこから1段ずつ階段（上昇音階）を上っていくと、長く伸ばす音が重なっていく場面へ。その中から、木管によるテーマが浮かび上がってきます。冒頭の上昇音階のモチーフは、この後もいろいろな場面で登場します。

しばらく行くと、ヴィオラとチェロから始まる弦楽合奏。慎ましくも、心が揺さぶられます。

弦楽合奏に管楽器が加わり、少しずつ盛り上がる中から、例の、トロンボーンのカッコいいソロが浮き上がってきます。このトロンボーンの旋律のところで、他の楽器は、同じ音を長く伸ばしながら、少しずつ変化しながら、ド（C）の音に収斂していきます。クライマックスです。演奏者は、ここに参加しているだけで幸せ、という気分です。

ここからしばらくの経過は、曲の後半部分でさらにドラマチックに再現されます！

その後少しテンポが速くなり、森の中に迷い込んだような気分になります。長調なのか、短調なのかわからない、不思議な感じ。ドリア旋法というそうです（レからはじまる音階で、シベリウスは交響曲6番で効果的に用いています）。

小鳥のさえずりが聞こえ、小動物のようなリズム。静けさからだんだん激しくなり、テンポも速くなり、切迫感を増していきます。



フィンランドで聞いたカレリアプラスバンドの思い出・・・

そして混沌。低音の弦のうねり（弦楽器は同じようなことを繰り返しますが、景色が少しずつ変化していきます）、その中からトロンボーンの旋律が現れ、管打楽器全体が絡んで第2のクライマックスへ。

一転して、歌のような、舞曲のような、素朴で暖かい音楽になります。牧歌的というか、民族的というか。私一度だけフィンランドに行ったことがあるのですが、そのときに大きなテント小屋みたいところで飲みながら聴いた、「カレリアンプラスバンド」というアマチュア団体の演奏をなぜか思い出します。

しばらく行くと、また様子が変わり、また鳥の鳴き声が聞こえてきます。周りを見渡すとそこには自然が…といった音楽になります。そして突然テンポが速くなり、弦楽器にティンパニーが加わって、同じような音型（先ほどの鳥の鳴き声の変型）を繰り返し始めます。くり返しながら、管楽器が階段を上り始めます（冒頭上昇音階の再現）。弦楽も上昇パターンとなり、そこからトロンボーンが出現し、前半部分のほぼ完全な再現がなされます。前半での感動的なテーマおよびその後の経過が、ここで劇的に再現されます。

この再現区間から横道にそれたところから、一気に曲は終結に向かいます。最後に、静けさの中で、トロンボーンの前例の旋律を、別の楽器が（おそらく万感を込めて）演奏します。そして、ホール中がド（C）の音で満たされて曲は終わります。（高橋 淳）

## 曲目紹介 2

# ベンジャミン・ブリテン チェロと管弦楽のための交響曲

Edward Benjamin Britten

### 1. ベンジャミン・ブリテンについて

1913年イギリスに生まれ1976年にやはりイギリスで亡くなっています。

第2次大戦時に、イギリスの戦争参加に際し兵役拒否の意味で一時期アメリカに住んだこともあります。生涯の大半をイギリスで過ごしました。

作品番号は95までありますが、その内容は非常に幅広く、特に、オペラは16曲あって、作曲年代もその生涯に亘っており、彼にとっても重要なレパートリーであったことが窺えます。その代表作が「ピーター・グライムズ(作品33)」で、その間奏曲だけを集めた「4つの海の間奏曲」は管弦楽作品としてもよく演奏されます(水響で今まで唯一取り上げたブリテンの作品が、まさに「4つの海の間奏曲」でした)。

イギリスの作曲家は、おしなべてその傾向が強いのですが、彼も、管弦楽だけの作品は意外に少なく、合唱曲や声楽だけの曲が目立ちます。それには、生涯の公私に亘る「パートナー」であったテノール歌手ピーター・ピアーズの存在も大きかったと思われます。

上記の「ピーター・グライムズ」をはじめ「戦争レクイエム」など、ピアーズの存在を前提に作曲された作品は多数あり、しかも、その大半が、彼自身の代表作となっていることを鑑みるに、それだけお互いに刺激しあう関係だったのでしょう。



ブリテンのクルマに乗るロストロさんと奥さんのヴィシネフスカヤさん

しかしながら、当時は、このような「パートナー」との関係は、社会的にはなかなか認められるものではなく、コミュニティの中でもストレンジな立ち位置を余儀なくされたと思われ、その点も彼の作風に大いに影響を与えたと考えられます。

(たとえば「ピーター・グライムズ」では、主人公ピーターは、小さな漁村のはずれに住む漁師で、いささか偏屈な性格もありますが、最後まで、村人から理解されずに一人で海にでていき船を沈ませて死んでいくという末路をたどります。この村はまさに、ブリテンがピアーズと住んだイギリスのオールドバラという小さな村を彷彿とさせます)

### 2. 「チェロと管弦楽のための交響曲」

作曲に至るまで

「チェロと管弦楽のための交響曲」(作品68:1963年作曲)は、チェロの巨匠、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチに献呈され、彼の独奏とモスクワ・フィルハーモニー管弦楽団との共演で、ブリテン自身の指揮により1964年3月12日にモスクワにて世界初演が行われました。

なぜ、イギリスの作曲家が、わざわざモスクワで初演をと思われるかもしれませんが、それは、ロストロポーヴィチの師でもあった大作曲家ショスタコーヴィチとの交流あってのことでした。ショスタコーヴィチのチェロ協奏曲第1番のイギリス初演(1961年)を、ショスタコーヴィチの隣で聴いたブリテンは、演奏の最中も興奮を抑えることができず、演奏後すぐに初演者のロストロポーヴィチのところに向かい、彼のために曲を書くことを了承し、それはすぐにチェロソナタ(作品65)として結実しました。このソナタの素晴らしい出来ばえに感動したロストロポーヴィチの依頼により作曲されたわけなのです。

この時期ほぼ同時に書かれている作品が、ブリテンの代表作である「戦争レクイエム(作品66:1961年)」です。強烈な反戦主義者であったブリテンが全精力を注ぎ込んだ「戦争レクイエム」が、この曲に大きな影響を与えていることは、曲想からも明らかに感じられます。

この曲の冒頭は、うごめくような低音の動きから始まりますが、曲の最後は全てを解決する堂々とした美しい和音で閉じられます。「戦争を二度と繰り返さない」という祈りにも似た感情、これこそが、ブリテンの悲痛な思いであり、この曲の通底に流れるテーマではないかと思えます。

なお、これ以降、ブリテンの作品は編成がどんどん小さくなっていき、実質的にフルオーケストラを使用した管弦楽作品としてはこの曲が最後と思われます。

### 3. 曲目紹介

#### ☆第1楽章 (Allego maestoso : 2分の3拍子)

ブリテンが書いたもっとも規模の大きいソナタ形式です。

バスドラム・コントラバス・チューバによる音階風の音型に支えられ独奏チェロによる独白にも似た雄大なフレーズから曲は始まります。

コントラファゴットのうごめくような細かい動きが、チェロの独白がなにかただならないものに触発されていることを暗示しているように感じられます。

チェロの揺れるような旋律に木管群が呼応し、木管の動きは弦の寂しげなピチカートが引き継ぎます。曲想は不安定なまま続いていきますが金管群のコラールの掛け合いの中、冒頭の独白が今度は木管によって奏でられ、チェロは音階風の音型に徹します(再現部)。

その後再度不安定な曲想が展開され、コーダでは、独白はチェロのピチカートで切れ切れに回想されますが、吟遊詩人の弾く豎琴のような風情も感じられます。曲はそのまま静かに消え去って終わります。

#### ☆第2楽章 (Presto inquieto:8分の3拍子)

inquietoとは「落ち着かない・不安な」という意味です。

スケルツォ楽章ですが、まさしく、奇怪かつ奇妙な落ち着きのない動きが全編を支配します。ほとんどの動きが弱音でなされます。

なにかに追い立てられるような、アタマのなかを搔き毟られるようなイヤな感じであっという間に曲は終わります。

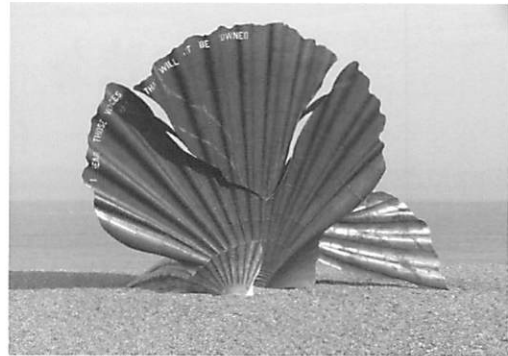
#### ☆第3楽章

##### (Adagio → Cadenza ad lib:2分の1拍子)

ティンパニの連打に乗り、チェロが気品のある旋律を朗々と歌います。

曲が弱まり、その旋律はホルンのソロとビブラフォンの伴奏により引き継がれますが、不吉な知らせのようなティンパニの連打が時折割り込みます。金管・木管が呼応するなか、チェロが抵抗しますがついにティンパニに支配され、そのまま、カデンツァに入ります。

カデンツァからアタックで4楽章に入り込み



オールドバラの海岸にある、ブリテンを記念した彫刻 The Scallop の写真

ますが、このあたりは、ショスタコーヴィチの協奏曲(チェロ協奏曲第1番・ヴァイオリン協奏曲第1番等)の構成に非常に似ています。

#### ☆第4楽章

##### (Passacaglia: Andante allegro :2分の2拍子)

カデンツァからそのまま2分の2拍子の伴奏型をチェロが力強く演奏するなかトランペットによる主題が、それまでの不安な曲想を一転するかのようにならかに奏でられます。

5つの変奏曲が展開されたあと、管とヴァイオリンによる最終変奏曲に入ります。

重層的なコラールの積み重ねのなかで、幾重にも重なる光が集合するがごとく、最後の極めて美しい堂々とした和音で全曲をとじます。

### 4. 最後に

個人的な話で恐縮ですが、実を言いますと、この曲は、長いこと委員長職をやっていたからか、「今回は好きな曲を1曲なんでも選んでいい」という特権を頂いて、さて何をと考えて選んだ曲です。

好きな曲1曲なんて、それはもう決められないくらいあるので、かなり悩んだのですが、2つの理由でこの曲に決めました。

某オーケストラで今回のソリスト丸山さんとプロコフィエフの「交響的協奏曲」を演奏する機会があって、あまりの素晴らしい演奏に、「いずれ、丸山さんとブリテンを！」という思いがずっとあったことが、まず一つ。それから、何よりも、こういう素晴らしい曲が、日本ではほとんど演奏されないということが非常に非常にもったいないという気持ちがとても大きかったです(今年はブリテン生誕100年だということに、日本でこの曲が演奏されるのは、水響のこの演奏会だけです!)

冷戦の最中にロシア人とイギリス人が出会い(それこそ命がけの邂逅だったのかもしれない)このような奇跡的に美しい音楽が生まれました。「音楽はすべてを超える」という事実を端的に示しているこの曲を通じ、希有の才能を持つ音楽家ブリテンに多少なりとも興味を抱いていただければ、それだけで、この曲を選んだ意味があったと私は感じております。

# チェロ独奏 丸山 泰雄 氏

～ インタビュー ～

聞き手 祐成 秀樹



——ブリテンの「チェロと管弦楽のための交響曲」は初挑戦ですね。

プロコフィエフやショスタコーヴィチの協奏曲は学生時代に必ず練習します。その次は、ハイドンの2曲にボツケリーニ、ドボルザーク、エルガーでしょうか。でも、その中にブリテンの曲は入らない。優先順位は相当下です。堤剛さんが日本初演して以来、プロもほとんど取り上げてないのでは。(編集注・調べたところ1989年の堤剛独奏、小澤征爾指揮の新日本フィルが初演の模様。ただし、版元のBoosey&Hawksは2007年のオーケストラアンサンブル金沢＝カルツネン独奏、ナッセン指揮＝が日本初演との認識)

——どうして演奏機会が少ないのでしょうか

すごく難解な曲なのに見せ場が少ないことが理由の一つでしょう。それに、チェロ協奏曲というと雄大で美しいメロディーを期待するけど、この曲は全く違うものを突きつけます。ブリテンはチェロの巨匠ロストロポーヴィチと親交が深く、彼のために何曲も作曲しました。今回の曲が書かれたのは、その中でも最初のほう。恐らくチェロの知識が少ない時期に、大風呂敷というか、大きな構想を描いて作ったのでしょう。ただ、その後、チェロの扱いに慣れてきたので無伴奏組曲などの名曲を作ることが出来たのだと思います。

——ロストロポーヴィチに当てたということ、ソリストにとって相当キツイ曲ですね。

彼は誰よりも速いパッセージが弾けた。一方で、誰よりも遅く弾いて誰よりも大きい音を出せたそうです。ブリテンは完全に彼の能力を信じて書いています。チェロってダブル(重音奏法)が苦手ですが、音が鳴りにくいことを承知でワザとやらせるし、打楽器に対抗するように弾かせるところもある。ただ、独奏チェロだけでなく、全ての楽器にも同様に厳しいことを要求しています。柔らかい音の楽器にわざと硬い音で弾かせるとか。

——なるほど、すべての奏者を追い詰めて、重苦しいほどの緊迫感を出している。

ロストロがモスクワで初演したのは1964年。ソ連と資本主義諸国の対立、すなわち東西冷戦という緊迫した時代背景が作品に反映したのでしょう。最初から最後まで緊迫感をほどこかない。死の予感を漂わせ、見たくないものを見せつける。だからこそ、現代の人が聞くと、難解だとか、魅力に乏しいとかと思う。だが、当時の人々は身につまされた。今起きている状況を見せつけられるのだから、いろいろ考えさせられたと思います。

——同時代のショスタコーヴィチと重なりますね。

西と東の違いはありますが、2人の作風は、内面を見つめ、人が聞きたくないことに焦点合わせて、胸元にぐさりと突きつける。ただ、ブリテンは、より洗練されています。

——難曲に取って挑戦しようと思った理由は。

演奏機会が少ない曲は弾けるチャンスがあるだけでありがたい。でも、改めて難しいと思います。ピチカート練習をし過ぎて爪が剥がれてしまいました。

——話は変わりますが、最近のお仕事を教えてください。

ソロと室内楽に一番力を入れています。たまに大阪フィルなどのオーケストラにゲストで呼ばれてソロのある曲を弾いています。芸能関係の仕事もやりますよ。ラジオやテレビでチェロの音を聞いたら、その3分の1ぐらいが僕の音です。年末のレコード大賞でも弾いたし、「ウルトラマンメビウス」「機動戦士ガンダムSEED」にも音を入れました。

——東日本大震災の被災地での慰問演奏にも熱心に取り組まれていますね。

100回以上は続けたかな? 仙台出身なので親戚や友人に被災した人が多く、身近な活動なんです。去年は空き時間はほとんど被災地で演奏しました。皆さん号泣しながら聴いて下さり、終わると人間の顔に戻る。危機的な状況の時こそ音楽は力を与えられる。慰問演奏を始めて、音楽って本当に必要で、人の役に立てると実感しました。

——アマチュアとの共演も多いですね。

いろんな世界の方と交流できる貴重な機会です。様々な会社や業界の話を聞きたいので積極的に飲み会に顔を出しています。僕らの業界って子供の時から楽器の練習ばかりをしてきた人が多いですが、僕がチェロを始めたのは15歳。それまではサッカーばかりでした。だから、僕の頭の中はアマチュアの皆さん寄りかもしれません。

——アマオケならではの魅力ってありますか。

プロでは絶対出せない音が飛び出すことがある。長続きしないのが欠点ですが、本職の人は毎日仕事でやっているんで、なかなか感動的な音が出ないんですよ。ただ、アマチュアって、ダメな時は信じられないぐらいヒドイ音が出るのも面白いですね。

——私たちの母体である一橋大管弦楽団との付き合いも長いですね。

学生時代にエキストラで、金洪才さん指揮の「パリのアメリカ人」(1985年)を弾きました。また、芸大のチェロアンサンブルの一員として兼松講堂で演奏したこともあります。ベルリン留学から帰国した後の96年にはドボルザークの協奏曲も独奏しました。

——最後に、今の水響についてどう思いますか。

おとなし過ぎますね。ニールセン4番のティンパニーの2人以外は。指揮者に何か引き出してもらおうと頼り過ぎているように見えます。音楽って、誰もがやりたいことを持ち寄り、指揮者の指示を嫌々従うぐらいがちょうどいい。楽しく弾くのはアマチュアの特権です。昔の一橋オケって、もっと楽しそうに弾いていたはず。皆さんは、そこにいたわけでしょう? 社会人になるといろいろ大変ですが、日曜日の練習日には忘れましょう。羊が500匹いてもいい音はしません。もっと狼になりませんか!



## 曲目紹介 3



# カール・ニールセン

## 交響曲第4番「滅ぼし得ざるもの」

Carl August Nielsen

さえいえるかもしれない。

### 1. 苦難と復活を繰り返すデンマーク史

紀元8世紀末からヨーロッパ中を荒らしまわったバイキングはキリスト教化と相前後して次第に定住型のノルウェー、デンマーク、スウェーデンという三王国を形成していく。そして14世紀半ば、デンマークを上位国として三王国の王を統一するカルマル同盟が成立し、それによりデンマークは当時欧州最大版図を誇る国家としてヨーロッパに君臨した。


しかしそれからのデンマークは総じて不運・災難が連発する。スウェーデンの独立、スウェーデンを奪還せんと目論んだ七年戦争での甚大な被害、ドイツの三十年戦争に無理矢理参戦しての大敗北とその結果としての広大な版図の喪失、北方大戦役敗北による北欧での地位の決定的没落、イギリス海軍によるデンマーク海軍の殲滅、ナポレオンの敗北による海上貿易利権とノルウェーの喪失、プロイセンと行った二度にわたるシュレスウィヒ・ホルシュタイン戦争の破局的な敗北による国土の40%（しかも国土の中で最も肥沃な地域）の喪失、よくもこれだけ不運が続いたかと思われるほど苦難が続くのである。デンマークは、周辺で次々に勃興する強国スウェーデン、イギリス、フランス、プロイセン、ロシアの暴圧にさらされ、少しずつ領土をむしりとられ、幾たびもの国家存亡の危機と恐怖に震えなければならなかった。本日の演奏会にはデンマークの関係者もおられるかもしれませんが甚だ申し訳ないが、デンマークはこの600年のうちでヨーロッパにおいて最も相対的地位が低下した国と

しかしデンマーク国民は決して敗残の民ではない。デンマークは破滅の危機に瀕する度に、たゆまぬ努力を重ね不死鳥のように甦り、小国に転落しながらも、小国としての運命を受入れつつ、経済的にも文化的にも小国として最高の成功を獲得するまでに至ったのである。徹底的な敗北を味わいながら奇跡的復興を遂げた大国日本や大国ドイツの歴史とはまた違った意味で、滅ぼし得ざる不撓不屈の精神がそこには力強く脈打っているといえよう。

### 2. そんなデンマークに生を享けて

カール・ニールセンは1865年デンマークの農村地帯に貧しいペンキ職人の息子として生を享けた。父は素人ながら村で楽団を組織するほどの楽器の達人。母も民謡好きで、音楽に満ちた一家であった。あくまでも我流で音楽に触れていたニールセンは、14歳の時、近くの町オーデンセの軍楽隊にもぐりこみ、そこでようやくモーツァルト、ベートーヴェンなどに触れる機会を得る。1884年、首府コペンハーゲンの音楽院に入学。1889年から王立劇場オーケストラのヴァイオリン奏者となり、そこでのオーケストラ経験が、いよいよシンフォニストとしてのニールセン形成の土台となっていった。1891年に交響曲第1番を完成後は順調にキャリアを重ね、1908年には王立劇場楽長に就任、デンマーク楽壇の中心人物になっていったのである。

経歴から分かるように、ヨーロッパの知識人のタイプとしてありがちな、祖国の大地・精神から「根こぎ」されたアウトサイダーと



違い、ニールセンはデンマークの民衆と大地にどっしりと根をおろしている。その意味ではアウトサイダーであることにアイデンティティを見出したマーラーとは対極的な存在といえるだろう。

### 3. 訪れた人間の尊厳の危機 そして迫りくる国家最大の危機

ニールセンの音楽家としてのキャリアが円熟を迎える頃、第一次世界大戦が勃発した。それはこれまでの戦争の概念を一変させる全く新しい戦争であった。機関銃・戦闘機・戦車・毒ガスといった大量殺戮兵器が次々に投入され、戦死・負傷する者の数はそれまででは考えられないような膨大な数にのぼった。従軍する兵士（多くは徴兵された一般人）は生命・肉体のみならず精神を烈しく蝕ばまれ、「シェルショック」（後のPTSD）にかかる者が続出し、無慈悲にメカニクに大量の人々が殺されていった。これは当時、人間の尊厳にとって最大の危機といえる状況であった。

更に開戦直後デンマークは、スカンジナビア半島とユトランド半島（その先端がデンマークの国土）の間（即ちバルト海の入河口）にあたる海上交通の要衝ストーラベルト（大海峡）に機雷を敷設することをドイツから強要される。設置せざる時はドイツと交戦状態になることが必至であり、中立を貫きたかったデンマークではあったが、泣く泣く機雷を敷設した。それでもなお、ドイツの船舶無差別攻撃で多くのデンマーク船員が命を落とし、更に戦時海上輸送の厳しい制約により、海運や自国酪農製品の輸出によって支えられてきた国民生活は極度に窮乏した。何より、これまで他国に全土を他国に支配されたことのないデンマークの土地が、ドイツの侵攻により、初めて制圧されてしまうのか、そしてデンマークそのものが滅んでしまうのか、国民にとってそのような恐怖に怯える日々が続いていた。

ニールセンが交響曲第4番『滅ぼし得ざるもの』を作曲した頃のデンマークの、そしてヨーロッパの状況は、このような危機的なものであった。

### 4. 交響曲第4番「滅ぼし得ざるもの」

交響曲第4番「滅ぼし得ざるもの」は、切れ目のない単一楽章の音楽ではあるが、シベリウスの7番のように完全に一体化したものというよりは、シューマンの4番のように四つの楽章がアタッカでつながるタイプである。ただ主題については、いくつもの主題が四つの部分に相互に顔を出し、非常に緊密に結びついていて全体的な統一は緊密なものとなっている。

第一部では、人間性を蹂躪せんとする全てのものを表象しているであろう好戦的な第一主題とやや憂いを帯びながらもやさしく慰めるような第二主題（これは両端楽章に現れるだけでなく、中間楽章でも姿を変えキャラクターを変えて登場する、全曲中、最も重要な、いわば『滅ぼし得ざる主題（以下不滅主題）』または『人間（精神）の主題』といえる）の激闘が描かれる。途中二度、不滅主題が壮麗に盛り上がり、ラストの勝利が予感される（マーラー第5交響曲第二楽章の終盤を思い起こさせる）。

第二部は、四部分からなるシンプルな安らぎに満ちた牧歌で、もっぱら殆ど木管のみによって演奏される。貧しくも幸せだった懐かしい幼時の回想なのか、あるいは一時的な戦士の休息なのか。

第三部は、一時休戦していた第二部を断ち切るように、怒りを伴い深い悲しみの情感に満ちた悲劇的な朗詠で始まる。一時安らぎに至るものの、後半は第三部に現れた三つの主題が激突し強烈な悲劇が訪れる。そして最後は第四部へのブリッジとして、火を噴く如き激烈なプレスト（con anima）が高弦から低弦まで吹き荒れる。緊張感が高まりきったところでいよいよ第四部に移行する。

第四部分は正に最後の戦い。朗々と歌い上げるような気魄に満ちた第一主題と、怒りのこもった第二主題のフーガが激突する。その対決がひとしきり盛り上がったところ

で、いよいよこの曲最大の見せ場にして最も強烈な箇所、即ち二人のティンパニ奏者による壮絶な闘争が開始される。これは全曲が訴え続けてきた、人間精神とそれを蹂躪せんとする力の最終決戦—この曲が北欧の作品であることを考えるなら、これはハルマゲドンというよりはむしろラグナロク（≒終末の日、神々の黄昏）と形容すべき—に他ならない。この闘いが強烈なグリッサンドで終わると、第四部第二主題のフーガが猛然と再開するが、すぐさま金管が不滅主題で割り込み、じわじわと不滅主題が主導権を握り、長らく待たれた勝利への期待が確信に変わってくる。一瞬かげりをみせるものの、それを断乎として断ち切るようにヴァイオリンが上昇し、遂に最後の勝利の時が訪れる。不滅主題が高らかに謳われ、一瞬鎮まった後、天国の門をゆっくりと押し開けるかのように cresc し、門の向こうから溢れ出た神の閃光が全てを包み込み、名状しがたい感動のうちに全曲が終結する。

## 5. その後のデンマークの運命 そして時を超えた 『滅ぼし得ざるもの』への祈り

破竹の勢いで欧州を席捲せるナチスドイツは1940年4月9日、国境から海からデンマークに大軍を侵攻させつつ最後通牒を行い、四時間後にそれを受諾したデンマーク国は遂にドイツの保護国と化してしまう。一国家の制圧として史上最短といえる電撃的なものであった。形ばかりの友好国として扱われたのも束の間、ナチスの傀儡政権はレジスタンスの激化で1943年8月29日に壊滅し、遂にナチスによる直接軍政が敷かれる。ニールセンが恐れていた祖国の滅亡の危機は30年近い時を経て遂に現実のものとなってしまったのである。しかし激烈なレジスタンスによるナチス、ナチス協力デンマーク人への凄惨な闘いの末、デンマークはいつしか枢軸国ではなく連合国とみなされ、ナチスドイツ軍降伏後は、戦勝国としての榮譽を味わうこととなったのである。

デンマーク、デンマークと同じようにナチスに国土を制圧されたノールウェー、ソ連の傲慢で卑劣な蹂躪に国際的な援助も得られぬまま徹底的に闘い、最後にはやむを得ずナチスに加担し、悲劇的な末路を辿ったフィンランド、友好国だったデンマーク・ノールウェー・フィンランドをある意味見捨てる事で奇跡的に戦火に巻き込まれることを避けえたスウェーデンの北欧四国は、20世紀を吹き荒れた最悪の二つの思潮、すなわちナチズムとスターリン主義が最も熾烈に激突する舞台となったのであった。

「人間の尊厳を抑圧する何か」がひたひたと自分たちを囲繞していることを察知したニールセンが『滅ぼし得ざるもの』に込めた、烈しく真摯なプロテスト（抗議）、そして同時に最後は人間の尊厳がそれに打ち勝つという祈りにも似たクレード（信仰告白）は、単に第一次世界大戦のデンマークの危機に対してのみ向けられたものではない。それはナチズムに対しても、スターリン主義に対しても、そして現代の我々を脅かすイスラム原理主義にも産軍複合体による帝国主義にも向けられているのである。だからこそニールセンの音楽が発する警告は、いまだ今日的アクチュアリティをもっているし、ニールセンが発する『滅ぼし得ざる』人間性への信頼と勝利の予感が、熱く烈しく我々の胸に迫ってくるのである。

（たかはしひろし）



滅ぼし得ざるニールセンの魂（というか面影）は、現代日本のお笑い業界にすら、くっきりと刻印されているという。  
（片方がニールセン、もう片方がニールセンにクリソツなさるお笑い芸人）

# 水星交響楽団

## ◇指揮者

齊藤 栄一

## ◇コンサートミストレス

中里 咲子

## ◇第1 ヴァイオリン

岩田 遥

伊東 陽子

岡田 紳太郎

佐塚 有美子

高橋 広

高原 苑

## ◎中里 咲子

永井 翠

西沢 洋

野村 国康

二島 詩帆

宮川 妙子

宮川 雅裕

米嶋 龍昌

## ◇第2 ヴァイオリン

安谷屋 靖

石川 貴隆

石川 直美

織井 奈津乃

川原 ひかり

黒川 夏実

小山 吉智

小林 美佳

鈴木 真由子

## ◎土屋 和隆

原藤 結香

堀田 淳子

前田 啓

山田 悠介

## ◇ヴィオラ

井上 潤也

井上 拓

小沢 未来

## ◎川俣 英男

木村 納

蔵満 里奈子

鈴木 尚志

祐成 秀樹

古屋 圭織

柳沢 成俊

## ◇チェロ

金澤 直人

金田 千畝

鈴木 皇太郎

## ◎首藤 ひかり

高橋 幾多郎

橘 温子

中山 佐知子

中山 憲一

日吉 実緒

右納 響

能岡 雅人

## ◇コントラバス

阿部 洋介

石附 鈴之介

野村 美里

深澤 雄己

増田 晴夫

## ◎刈田 淳司

松岡 和男

大西 功

## ◇フルート

大平 明香

工藤 美季

西村 かよ子

本田 洋二

## ◇オーボエ

川崎 綾乃

齋藤 暁彦

野口 秀樹

長谷川 実里

## ◇クラリネット

西村 伸吾

藤原 誠明

横地 篤志

馬場園 真吾

## ◇ファゴット

小田中 優介

金谷 蔵人

木村 駿介

富井 一夫

## ◇ホルン

伊集院 正宗

岡本 真哉

杉本 裕宣

深村 美佳

山形 尚世

山崎 智哉

## ◇トランペット

岩瀬 世彦

金子 恭江

細川 紗耶香

## ◇トロンボーン

佐々木 英王

佐藤 幸宏

福澤 親

小笠原 剛

## ◇チューバ

植松 隆治

## ◇パーカッション

鈴木 海里

高橋 淳

椿 康太郎

松山 若菜

山本 勲



## 水星交響楽団第49回定期演奏会

2013年9月16日(月・祝)

すみだトリフォニーホール

13:00 開場・13:30 開演(予定)

バーンスタイン：プレリウド・フーガ&リフ

ラヴェル：バレエ音楽「マ・メール・ロワ」(全曲)

R.シュトラウス：交響詩「英雄の生涯」